

今なお輝き続けるプリンセス
Legend of Princess Diana
ダイアナ妃
という伝説

Text : KAORI NAKANO

vol.4

ファッションについて

Fashion



〈右〉1986年の日本訪問では、日の丸ドレスで日本への敬意を表していた。懐かしと思う人も多いはず。© Tim Graham/CORBIS

〈中〉皇太子の婚約者として初めて公の場に現れたダイアナと、モナコのグレース王妃とのツーショット。このふたりが先々、共に不可解な自動車事故で世を去るなど、この時誰が想像しえただろうか。© Quadrillion/CORBIS

〈左〉1982年、ウィンザー城で皇太子のボロの試合を観戦するダイアナ妃は、ウィリアム王子を懐妊中。マタニティドレス姿もラヴリー。© Tim Graham/CORBIS



サンパウロの孤児院で、ケアリング・ドレスを着て幼児を抱くダイアナ妃。辛い思いをしている人のため明るい色を選び、相手に直接触れられるよう半袖を、子どもがおもちゃにできるネックレスを身につけて。© Tim Graham/Corbis



1992年、ヘレン・ウィンザー令嬢の結婚式に出席したダイアナ妃。鮮やかな単色の使い方が、ロイヤルな雰囲気。幼いヘンリー王子と一緒に。Anwar Hussein/WireImage.com



この夏、没後10年を迎えたダイアナ妃。その鮮烈な存在感は、今もなお薄れることがありません。この連載では、イギリスの文化に通じたエッセイストの中野香織さんがダイアナ妃の真の魅力、現在の視点から分析してゆきます。今月のテーマは「ファッション」について。彼女の装いにはその時々思いが込められていたがゆえに、印象的だったのです。

チャールズ皇太子がテレビで不倫を告白する夜のディナー・パーティに、大胆なミニドレスで現れたダイアナ妃。「リベンジ(復讐)ドレス」と呼ばれた一着。Alpha/amanaimages

ダイアナ妃の装いは常に、そのときの彼女をおもしろいほど語る。だから年代順に写真を並べると、波乱に富んだドラマができあがる

決まりきったスタイルがなかったからこそダイアナ妃の着た服は彼女の人生そのもの

英国女王は公の場に出るときに着る服を「プロップ (props)」と呼ぶ。お芝居の小道具という意味である。王室のメンバーに求められるのは、演劇的な役割。だから装いはファッションステイトメントであってはならない。エリザベス女王の写真を見て眺めると、そんなゆるぎなきロイヤルスタイルが見てとれる。

また、王室のメンバーではないが、ジャクリース・ケネディは、ファーストレディとして求められる役割を果たしつつ、ファッションリーダーとして世界中の女性から模倣された。「ロイヤルな」印象を失わないのに、ファッションナブル。ケネディ時代の彼女の写真からは、そんな「ジャッキースタイル」が感じ取れる。

しかるに、ダイアナ妃はどうか。典型的なロイヤルスタイルの実践者ではない。かといって筋の通った「ダイアナスタイル」があるかといえば、そうでもない。ときには失敗もしながら、あらゆるテイストに果敢に挑み続けている。

しかも、その装いは常に何かを伝える。そのときのダイアナをおもしろいほど語る。だから、結婚前のスローンレンジャー時代から、亡くなるまでのダイアナ妃の写真を年代順に並べていくと、波乱に富んだ「女の一生」のドラマができあがる。まるでカラーになったサイレント映画のように。ダイアナ妃は、ファッションを通してコミュニケーションできた女性だった。「物語」や「思い」を伝えるダイアナ妃のファッションは、それゆえ、見る人の目ばかりでなく、心にまで焼きつく。

ダイアナ妃が着たおびただしい数の服は、人々とのコミュニケーションのために注いだ努力を映し出すものが多い。とりわけ海外を訪問するときには、訪問国への敬意をファッションで表現する。1986年の日本訪問時に着た「日の丸ドレス」もそのひとつ。フラ

文・中野香織

なかの・かおり ●エッセイスト・服飾史家。1962年生まれ。東京大学文学部および教養学部卒業。東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得。イギリスのケンブリッジ大学客員研究員などを経て文筆業に。イギリスとその文化にも詳しい。連載記事は日本経済新聞、朝日新聞ほか多数。近著は『着るものがない!』『モードの方程式』(共に新潮社刊)など。訳書も多数、手がけている



〈右〉エンリコ氏。〈上〉ダイアナ妃の好物、車えびとズッキーニの生タリオリーニ



歴代最年少で英国王室の総料理長を務め、その任期中、英国皇太子夫妻の専属シェフとしてケンジントン宮殿でも活躍し、ダイアナ妃に料理を作っていたという経歴を持つエンリコ・デルフリンガー氏。「ダイアナ妃は常に前向きで、素敵な方。キッチンに遊びにいらしては、レシピを尋ねられたりもしました。生パスタやニョッキなどが好きで、彼女にお出した料理のいくつかはこの店でも出しています」。表参道の店「オフィチーナ ディ エンリコ」に加え、11月からはアルマーニ銀座タワー 10階のレストランも、彼の店が料理やサービスをプロデュース。英国王室、米国ホワイトハウス、ローマ法王と世界のトップを喜ばせた彼の料理が東京で味わえます。●オフィチーナ ディ エンリコ 東京都渋谷区神宮前 4-26-21 カレント表参道3階 ☎03-3401-7262 ㊟11時半～14時半(L.O.)、18時～22時(L.O.) ㊟月曜



〈右〉1996年、ウェルサーチのロイヤルブルーのドレスで。当時流行した、ワンショルダーのデザインが印象的。© Tim Graham/Corbis

〈左〉1996年、NYで催されたディオール50周年パーティーにて。左からガリアーノ、トップモード誌の編集長リス・ティルベリス、LVMHグループ会長アルノー夫妻と共に。ファッションビブルとしての貴族も充分感じて。SIPA/amanaimages



ダイアナ妃はファッションを通してコミュニケーションできた女性だった。思いを伝える彼女の装いは、見る人の心にまで焼きつく

ムロードのブティックで見つけた既製服である。きめ細かさに感心するのは、たとえば1991年にブラジルを訪問したときに、ワールドカップの決勝で敗れたブラジル・サッカーチームの緑と黄色を避け、さらに敵国アルゼンチンチームの青と白まで使わなかったこと。現地のエチケットをあらかじめリサーチしていたデザイナーのキャサリン・ウォーカーが「その色が暴動を起こすかもしれない」と配慮した結果でもあった。

ダイアナ妃の人生の物語においてファッションは欠かせない要素

慈善活動に携わるときの装いも、相手とのコミュニケーションを考慮して選んでいる。病院へ行くときには明るいい色を。なかでも、タコイズと黄色と赤の花柄がちりばめられたダークブルーのデイヴィッド・サースンのドレスは、「ケアリング・ドレス(慈しみのドレス)」と呼んで繰り返し着た。服は常に半袖だったが、それは相手に直接、触れるため。だからロイヤルプロトコルである手袋もつけなかった。目が見えない人を訪れるときには感触がおもしろい服地を選び、子どもたちを訪問するときには、抱いたとき子どもがおもちゃにできるようなぶら下がるネックレスをつけた。

そんな意識的なコミュニケーションばかりではない。ダイアナ妃の意図の有無にかかわらず、ファッションがダイアナの「物語」を伝えてしまう場合も少なくない。たとえば、自信なさげ、ちょっとヤボな「シャイダイ」の「ミ」から、どんなトップモードをもグラマラスに着こなす世界のファッションアイコンへの変貌。そんなダイアナ妃の変貌の歴史の始まりと転機も、ふたつの黒いドレスが物語る。

ダイアナ妃の人生の節目には必ず黒いドレスが存在した

1981年3月、チャールズ皇太子の婚約者として初めて人前に姿を現す夜、ダイアナが選んだのは、デイヴィッド&エリザベス・

エマニュエル夫妻がデザインした黒のストラップレスのロングドレス。これが既製服で、直す時間がなく、ダイアナが車から出るときにずり落ちそうになった。「息づかいが聞こえそう」なドレスはメディアに大うけ、結果、「ウインザーショー」の主役はダイアナにいつてしまい、しかも「王室のメンバーは喪中と葬式にのみ黒を着る」というプロトコルを破って王室の人々の矚目をかう。ダイアナと王室との確執の始まり始まりと活弁士なら語りそうなドレスである。

それから13年後の1994年6月、チャールズ皇太子がテレビで自らの不倫を告白する模様が放映される日。ダイアナ妃はサーペンタインギャラリーの夕食会に出席する予定だった。当初、ヴァレンティノのブルーのドレスを着るはずだったが、執事は、黒いシルククレープのオフショルダーのカクテルドレスをすすめる。クリスティーナ・スタンボリアンの、これも既製服である。中央に卵型サファイアをあしらった真珠のチョーカー(皇太后陛下からの婚約プレゼントをリファームしたお気に入り)をつけたダイアナ妃は、この世になんの心配ごともないわという余裕の微笑をたたえてさっそうと車から降りた。翌朝、全新聞の一面をダイアナ妃が飾る。デイリーミラー紙にいたっては「これでもか(『The Sun』)という大見出しをつけ、不倫告白の皇太子については「統治者不適任」と小さく出しただけ。ダイアナ妃をウインザー戦争(サーペンタインの戦い)において「勝利」に導き、ひとりの女性の自立をまぶしく印象づけたこのドレスは、「リベンジドレス」「ファックユードレス」とひそかに命名され、ダイアナ妃の転機を鮮やかに伝える。

ダイアナ妃といふ協力関係を続けてきたキャサリン・ウォーカーが受けた最後の注文は、執事からだった。棺に入るとききの服である。ウォーカーはダイアナ妃が今にも起きて笑顔で歩きだしそうな黒いドレスを作った。